

# Dr.'s Eye

異国の地で病気になった時ほど心細いことはありません。

私は二十二歳の時、一人でアジアを八カ月旅し、いろいろな経験をしました。インドの農村では高熱が続き、二週間ほど安宿で寝たきりに。イラ

き、ミャンマー(旧ビルマ)では腹痛でピンク色の筋肉注射をわけもわからないままにしてもらい、香港では夜間の救急



医師 茂 波 菅

外来で三時間待ったことがあります。

現在、日本にも外国人が増えてきています。私の医院にもよく来られます。

す。ほとんどの場合、英語で病気について良く説明してもらいたいと希望されます。言葉が通じない、習慣が理解してもらえない、お金がいくらか

発展に貢献しようという十三カ国の医師たちを中心としたネットワークです。今、外国人が日本人と同じように医療サービスが受けられるように医

ています。相談電話は開設三カ月で三百件を軽く突破しました。一番大切なことは外国人が日本人と同じように医療サービスが受けられ

## 病気になった外国人のために

かるのか。心配、不安は想像以上です。

私はアジア医師連絡協議会という団体の会長をしています。医療問題に取り組みながらアジアの

療情報を提供する「国際医療情報センター」を東京で開設しています。待

機している通訳ボランティアが医療機関を紹介、医療問題について助言し

るよう情報提供することです。岡山でもそろそろ準備を始めてもいい時期

に来ているように思います。

健

康